

政府開発援助成功の足跡と日タイ友好のシンボル —KMITL創立記念碑—

総務省 国際戦略局 技術調査専門官

ぬま た 沼田
なおりち 尚道



プロローグ —KMITL創立30周年の頃—

1991年8月22日、成田を飛び立ったJL717便は順調に飛行を続けていた。機内で私の隣に座っていたのはプロジェクト方式技術協力のためモンクット王ラカバン工科大学(KMITL)に赴任する箱石千代彦チーフ・アドバイザー。私はバンコクに事務局があるアジア太平洋電気通信共同体(APT)にプログラム・オフィサーとして勤務するための渡航。共にJICAが派遣する専門家である。ドンムアン国際空港に到着すると、箱石チーフ・アドバイザーはKMITLプロジェクトの日本人専門家の皆さん(NTT、NHK、東海大学、JICA)の熱烈なる歓迎の輪に囲まれた。

1991年当時、日本政府の政府開発援助(ODA)によるKMITL拡充計画(第3次プロジェクト)が実行中であった。1987年3月の拡充計画事前調査に始まり、1987年9月の拡充計画長期調査、1987年12月の拡充計画実施協議調査、1989年11月の拡充計画巡回指導調査、1990年12月の拡充計画打合せ調査、1991年11月の拡充計画巡回指導調査、1992年11月の拡充計画最終評価調査と矢継ぎ早とも言える間隔で調査団が構成されプロジェクトが進められていた。そして、1993年3月にこのプロジェクトは終了した。5年間に投入された機材費は約8億7300万円、プロジェクトに参画した長期専門家は11名、短期専門家は延べ95名、カウンターパート研修で日本に派遣された者は30名を数えた。

1. ラカバン・キャンパスに立つ創立記念碑

今日、KMITL工学部棟の横に、創立記念碑を見ることが



■ 図1. 1986年10月完成の学術センター(1993年筆者撮影)
日本の無償資金協力が分36億9000万円、タイ側負担工事分8000万円をかけ、中央管理棟等の他の3棟と共に建設された

できる。この創立記念碑は1950年代以来の日タイの友好関係とKMITLの発展の歴史を静かに語りかけてくれる(図2)。

この記念碑には、タイ語、日本語、英語で「この電気通信訓練センターは電気通信技術協力の推進を図るため1960年8月24日に締結された日タイ両国間の協定に基づき設立されたものである」と記された石板がはめ込まれている。水色に塗装された石板に黒文字で刻まれた文字は、手彫りの大変素朴なものであり大変目を惹く。しかし、この1960年設立の碑文だけでなく、上部エンブレム・ロゴに示された名称とタイ数字が示す年にも注目したい。そこにはタイの地図、タイ語と英語で「ノンタブリ電気通信大学(Nonthaburi Institute of Telecommunication)」の文字、タイ数字で「2504」が記されている。「2504」はタイ公式の仏暦表示であり西暦1961年を表す。1961年はノンタブリ電気通信訓練センターが開校した年である。

2. ノンタブリ電気通信訓練センター —1961年開校—

1958年、日本のODAによるタイへの援助として電気通信訓練センターを設立しようという案件が日本の郵政省と外務省との間で議論されていた。折しも、1950年代後半、アジア極東経済委員会(ECAFE)において電気通信開発問題が議論されていた(ECAFEは1974年にアジア太平洋経済社会委員会(ESCAP)となる。余談だが、ECAFE/ESCAPでは、1950-70年代、アジア高速道路網計画と共にアジア電気通信網(ATN)計画が議論されており、これが1979年のAPT設立に結びついていく。当初APTは



■ 図2. 工学部棟の脇に立つ創立記念碑(2017年筆者撮影)



ATNの運営体として構想されていた)。

当該センター設立に関する協定の署名までには様々な調整が行われた。タイとの折衝が開始された当初、東京側は電電公社の電気通信学園を想定していた一方、タイでは職業訓練は文部省の所掌であったため協議は難航した。タイ電話公社(TOT)が米国援助を受けており、これとの競合を避ける必要もあった。1965年、TOTはUNDPの援助の下に電気通信訓練センター(執行機関がITUだったため「ITU電気通信訓練センター」と通称された)を設けることになる。

日本の調査団が最初にタイに派遣されたのは1959年8月3日から9月7日。8月26日にノンタブリ市に電気通信訓練センターを設置する旨の合意議事録に調印した。これに基づき、創立記念碑にも刻まれている「日タイ間の協定」への署名を待たずして、1960年4月に建物工事が起工された。さらに、9月には訓練用機材の据付け工事も開始され、翌1961年1月10日に当該工事が落成した。

電気通信訓練センターの敷地としてタイ側が用意したのは、バンコク中心地から北に約15kmのチャオプラヤ川の河畔の町であるノンタブリの椰子とドリアンの林の中の古い木工学校の跡地であった。この木工学校として使われてきた木造校舎に加えて、タイ側の費用負担によって新たに鉄筋コンクリート4階建ての新校舎が建造されることになる。なお、この敷地は隣接するランナブン寺院の所有の土地であり、この土地を長年借用することになる(借用は2001年まで続いた)。

1961年2月16日朝、1960年8月24日の「日タイ間の協定」に基づいて設置された電気通信訓練センターの開校式が盛大に挙行された。日本政府の援助額は約1億2000万円、NTTとKDDからの機材供与が約1億4000万円。タイ側の

校舎建築費用負担が約4500万円であった。

開校式の挨拶で、大江晃駐タイ特命全権大使は「将来の友情と協力のシンボルとして永遠に存在することを希望する」と述べ、列席したタイの文部大臣らはこのセンターを「日本の技術協力のパイオニア」として高く評価した。

1961年11月28日には開校間もないノンタブリ電気通信訓練センターを池田勇人総理大臣が、1967年9月30日には佐藤栄作総理大臣が視察している。

3. ODAによる協力の仕組み —継続は力なり—

ここで、KMITLの発展に寄与してきた日本の政府開発援助(ODA)による協力の方式について簡単に触れておく。

日本のODAには、大きく分けて、無償資金援助、プロジェクト方式技術協力、個別専門家派遣(短期、長期)、研修生受入、第三国研修、海外青年協力隊派遣等の形態がある。

プロジェクト方式技術協力は、通称「プロ技」と呼ばれ、長期専門家チームが構成され、個別の技術ごとの短期専門家派遣や機材供与と組み合わせて、4~5年間にわたって技術移転・技術協力が実施される。その実施に先立って調査団が派遣され、綿密な調査と計画立案が行われる。

1960年の日タイ間政府協定締結直後からプロジェクト方式技術協力が実施され、その後、無償資金援助による施設・機材の拡充に取り組み、第2次から4次のプロ技の実施を重ねるという「プロ技」と「無償」の組合せによって、タイ側カウンターパートとの密接な協力・連携の下、ノンタブリ電気通信訓練センターを国立大学に、さらに、大学院を持つ総合的技術系大学KMITLへと育て上げてきた。1978年2月には、各国からの研修生を受入れる第三国研修を実施するに至った(表)。

■表. KMITLへの技術協力の経緯 (ODAベース)

1960年 8月24日	電気通信訓練センター設置に関する日タイ政府間協定締結
1960年8月24日~1965年8月23日	プロジェクト方式技術協力(第1次) —機材供与:総額約2億円 マイクロ波、搬送電話、電信、電話、無線、線路、TV放送、ラジオ放送
1973年 - 1974年	無償資金協力 講堂、図書館、記念館、通信実験研究棟、体育館、機材 一約9.6億円
1978年12月12日~1983年12月11日	プロジェクト方式技術協力(第2次) データ処理工学、半導体工学、電力工学 一約6.5億円
1984年 - 1986年	無償資金協力 講義・実習棟、中央管理棟、情報センター、食堂、学生寮 一約36.9億円
1988年4月1日~1993年3月31日	プロジェクト方式技術協力(第3次) 電気通信、データ通信、放送、機械工学 一約8.7億円
1993年9月 - 1996年9月	個別専門家派遣
1997年10月1日~2002年9月30日	プロジェクト方式技術協力(第4次) 情報通信技術研究センター(ReCITT) 設立 一約15.7億円
1978年2月 - 2003年3月	第三国研修 1978年2月に「電気通信技術コース」として開始し、1993年11月から「上級電気通信技術コース」に。2003年3月迄に合計514名を受入れ。



そして、KMITLは、世界に数ある日本のODA協力案件の中にあって、「最も成功した事例」とも評されるようになった。KMITLにおける長きにわたる協力の歴史とその成功譚は、JICAタイ事務所のインターネットサイトに掲載された宮崎桂所長（2018年着任）の所長あいさつでタイでの協力の例として言及されるなど、今日においても語り継がれている。

4. ノンタブリ電気通信大学 —1964年大学に—

1961年から3年間という大変短い期間ながら、「電気通信訓練センター（Telecommunication Training Center）」と記された創立記念碑がノンタブリ・キャンパスの校庭中央に置かれたことがあった（図3の左側）。

1961年7月、ノンタブリ電気通信訓練センターを「学校形式」に変更する方向性が打ち出された。日タイ委員によるセンター運営委員会による審議の結果、当該訓練センターは3か年の大学課程とし、その目的は「通信に必要な基礎的技術を習得せしめ、応用力を涵養すること」とされた。

今日、ラカバン・キャンパスに見られる創立記念碑は、1964年に電気通信訓練センターが3年制の電気通信大学となった際に造り替えられたものだ。円形のエンブレム・ロゴに記された英語とタイ語の「電気通信訓練センター」の文字は、このとき「電気通信大学」に変更されたが、西暦1961年を意味するタイ数字の「2504」はそのまま残された。この大学がノンタブリ電気通信訓練センターの流れを汲むことを記録する意味が込められたものと思われる。

造り替えられた新しい創立記念碑は、ノンタブリ・キャンパスの校庭の真ん中にあった初代の記念碑に代えて、新設の鉄筋コンクリート校舎脇に設置された（図4の⑪）。

5. モンクット王工科大学 —1976年ラカバンに移転—

1970年7月、ノンタブリ電気通信大学は、北バンコク工業専門学校、トンブリ工業専門学校と合併して、学士課程



■ 図3. 創立記念碑のエンブレム・ロゴ比較
左側が「ノンタブリ電気通信訓練センター」、
右側が「ノンタブリ電気通信大学」（ラカバン・キャンパスに現存）

としての「モンクット王工科大学（KMIT）」が誕生した。

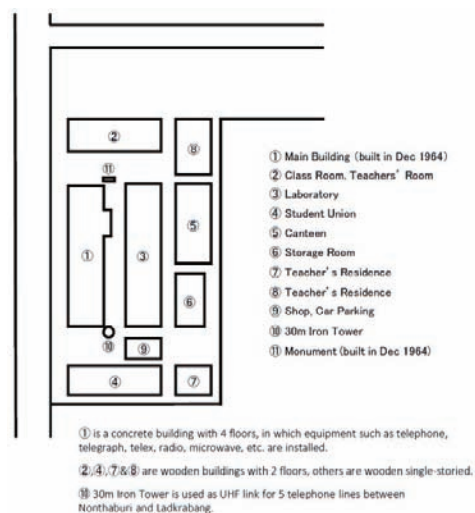
JICAプロジェクトの田中眞三郎チーム・リーダーは、「将来の学生のためにも、輝かしい未来のためにも移るべきだ」として、1000坪のノンタブリから33万坪のラカバンへの移転を推し進めた。その際、「通信に限定しない、電気工学、コンピュータ工学、制御工学などを含めた新しい発展」を説いた。1971年10月20日に田中リーダーの後任として着任した徳田修造チーフ・アドバイザーは、ラカバンへの全学生の移転のための校舎拡充に取り組んだ。新校舎の建設のための日本政府の無償援助は合計9億5320万円に上った。

1976年、KMITノンタブリ校はバンコクから東20kmのラカバンに移転し、KMITラカバン校（KMITL）となった。そして、同年6月16日、国王、王妃両陛下を迎えての落成式が挙行された。

1978年7月12日、岸信介元総理大臣がKMITLを訪問している。これに先立つこと20年、1957年5月20日から6月4日にかけて、岸信介総理大臣はタイを含む東南アジア6か国を歴訪しており、この歴訪がこれら諸国への技術訓練センター設置構想のきっかけになったと伝えられている。

6. モンクット王ラカバン工科大学 —1986年から—

1976年のラカバン移転に際し、ノンタブリ電気通信大学を母体として工学部が置かれた。加えて、建築学部、農業技術学部、産業教育理学部が誕生した。そして、1980年代には、タイの第5次・第6次国会経済社会開発5か年計画に沿って、学部増等の拡充が進められた。そうした中、1982年にはタイで最も早く博士課程が設置されている。



■ 図4. ノンタブリ・キャンパス校舎配置図
1975年10月国際協力事業団発行の『モンクット王工科大学報告書』3頁に掲載の校舎配置図を基に筆者が作図



1986年、「モンクット王ラカバン工科大学 (KMITL)」として独立した一つの国立大学となる。同時に、「北バンコク校」と「トンブリ校」もそれぞれ別の国立大学として独立した。ラカバン校が日本の援助を受けて拡充してきたのと同様に、北バンコク校は西ドイツの西独技術学校から、トンブリ校はUNESCOからの技術協力を受けて発展した経緯を持つ。

創立30周年を迎えた頃には、KMITLはタイで1、2を争う有数の大学に成長し、産学官の各界に優秀な人材を輩出してタイの経済社会を支えるに至った。

また、令和の今日、KMITLは、即戦力となる技術者の養成にも力を入れており、日本の国立高専機構の協力を得て2019年5月12日に高専 (KOSEN-KMITL) を開校した。

7. KMITLにおける日タイ協力とゴーン学長

ラカバン・キャンパス開設当時のKMITL工学部ゴーン (Kosol Petchsuwan) 工学部長は、その後、副学長を経て、1986年から1992年まで学長を務めた。ゴーン学長は、タイの経済社会の発展のためには電気通信分野のみならず科学技術分野全般にわたる人材開発が必要である旨を力強く説き、また、日本のKMITLに対する継続的技術協力を切望した。そして、KMITLは、1991年には、タイの電気通信開発に向けた人材育成において重要な役割を担うとともに、他の工学系大学の指導的位置付けとなった。

今から30年前、創立30周年に際してゴーン学長 (当時) は、次のような言葉 (原文英語、中田静馬訳) を残している。

「30年前に日本政府の協力で設立された電気通信に関する小さな訓練センターが、単科大学そして国立大学へと一步一步発展してきたことを大変誇りに思っている」

「日本政府の協力で設立されたユニークな歴史を持つKMITLは、日本人とタイ人との間に永遠に続く友好のシンボルである」

「KMITLがタイ国開発のための科学技術の優れたセンターに発展していくことが我々の希望である」

8. 創立記念碑・ノンタブリからラカバンへー2000年ー

1976年にノンタブリからラカバンへの移転後も、工学部の一部の授業や実習は引き続きノンタブリ校舎で行われていた。最終的にノンタブリ校舎が閉鎖されたのは2001年である。この閉鎖に先立ち、ノンタブリ・キャンパスにあった創立記念碑は、2000年に現在の場所に移設された (図2、図3の右側)。なお、1963年完成の鉄筋コンクリート4階建ての



■図5. 2017年8月24日 仏像除幕式での一幕 (筆者撮影)
工学部中庭の仏像前で僧侶と向き合うコムサン工学部長

ノンタブリ・キャンパス本館は、現在ではノンタブリ市役所の庁舎として使用されている。

9. 工学部中庭に佇むアユタヤ仏像ー2017年建立ー

記念碑ではないが、本稿の締めくくりに一つ紹介しておきたいことがある。ラカバンのKMITL工学部の中庭に静かにたたずむ仏像である (図5)。

2017年8月9日、私はNICTアジア連携センター長として再びタイに赴任した。着任の挨拶としてKMITL工学部を表敬訪問した際、来るKMITL創立記念日に開催される仏像の落成除幕式にお招きいただくという栄誉を得た。

KMITL工学部中庭の仏像はアユタヤのナ・プラメン寺院から勧請された。この寺院だけは過去の隣国との戦禍にあっても破壊を免れたのだと聞く。この仏像勧請プロジェクトはコムサン (Komsan Maleesee) 工学部長のイニシアティブで進められ、仏像を複製するに際して最新技術が駆使された。伝統的な仏教文化と最新の情報通信技術の融合が、緑豊かなラカバン・キャンパスの雰囲気を作っていることを感じさせられる。タイは言わずと知れた仏教国。超近代的な高層住宅が建ち並ぶバンコク都心でも、ようやく日が昇ろうとする早朝、僧衣をまとった僧侶が托鉢に回る。

2017年8月24日午前、創立記念碑の立つ工学部棟前の中庭にて、KMITLの発展を支えてきた関係者・来賓の列席を得て、僧侶の読経のもと厳かに除幕式が挙行された。

参考資料

- [1] 『一つの国際協力』 KMITL30年編集委員会 平成4年4月
- [2] 『東海大学の国際協力』 東海大学 2005年3月31日
- [3] 『モンクット王工科大学報告書 (1971年10月ー1974年7月)』 国際協力事業団 昭和50年10月
- [4] 在タイ日本国大使館 <https://www.th.emb-japan.go.jp>
- [5] JICAタイ事務所 <https://www.jica.go.jp/thailand/>